中国における庭園舗装の特色

Feature of the Garden Pavement in China

河原 武敏

Taketoshi Kawahara

Key Words 1. 特色 2. 庭園舗装 3. 中国

1.Feature 2.Garden Pavement 3.China

はじめに

わが国の飛び石や延段など簡明で洗練された庭園舗装に比較して、中国のそれは「花街舗地」と称されるように、その精緻な図案模様に驚く。その理由について樋田直人は《中国の暮らしと文化》で「中国では“地面”は必ず人間が造らなければならない、これが中国の庭園美の根底にある。“道”は祖先（先人の足跡）を意味しており、それは尊び美化するものである。足元の「地」に美しい卵石・小石、砂岩の青石や遠方から色石を取り寄せ、更に人工の磚や白磁片で大地にちりばめ敷き詰め、華麗な文様を造った。これが「舗地」である。」と説明している。

したがて中国庭園を理解するには、技法のほかに暮らしの文化に対する知識は欠かせない。本文はこうした要求をふまえ庭園舗装の沿革、計画の基本的な考え方、その種類と工法を考察して特色を明らかにする。

1. 沿革

床に舗装する理由は、湿気や土埃を防ぐためである。太古の住居は「茨茅土階」（しぼうどかい）と称され、地面に蓆を敷いて

座る生活である。しかし冠をつけた貴人にはふさわしくない」とされ、土に石灰をまぜた三和土を用いていた。やがて椅子の生活が始まっても湿気と土埃の問題が解決しないため、土を焼いた紅焼土を用いたが、やがて工法の煩雑さから磚敷きが工夫された。

磚舗装の沿革は《中国古代建築技術史》に詳しいので、その概要を紹介してみよう。初見は西周（BC1044-771）末の陝西省扶風県齊家村黄堆公社である。大きさは約50×50cm、底には滑り止めらしい半乳頭の突起物があった。河南省新鄭県鄭韓古城遺跡から出土した磚にも底に辺稜の付いており、その大きさは34×39cmと35×47cm、表面には米字紋・縄紋がつけられていた。

文献上は春秋時代の《書経》に「甃（磚）の土手道」とあるが詳らかでない。戦国時代の河南省新鄭倉城遺跡には低温焼土で耐磨性の低い紅焼土が発見されている。

秦代には陝西省咸陽宮遺跡から長辺にほぞ〔子母榫〕の付いた鋸齒形平行線紋磚が出土し、その大きさは55×33×5cm、平滑な仕上げではあるが製作が難しく、あまり使われなかったようである。付近の西安市

臨潼県秦俑坑の長廊には両端が楔状で噛み合わせのよい条磚の工夫が見受けられた。

漢代に入ると望都一号墓に連結しやすい扇形磚や広州造船工場遺跡には 70×70×12~15cm の大型磚が出土し、底には幾つかの小孔があり焼上げを容易にしている。しかし秦漢時代になると異形磚は次第に淘汰され、方磚（正方形の磚）と条磚（長方形の磚）が一般に普及し、研磨技術と継ぎ目に石灰を用いた接着剤が使われると、工法が容易になり工事量も増大した。

唐代には舗装技術が高度に発達し、西安市の長安大明宮に上面が大きく下面がやや小さい磚が工夫され、継ぎ目（目地）の断面が三角になるため、地盤と堅固に密着し目地が見えないほどである。表面もまたが平滑で防湿効果に優れていた。

宋代にもこのような磚が用いられ、当時の技術書《營造方式・卷 15》5）に「磚面の四面はあらかじめ研磨し、定規を用いて正確に仕上げるべきだ」と記載されている。

明清時代に至ってもこの技法が継承され、更にセメント 1 に砂 3 の割合に混合した粗モルタル目地〔粗灰泥〕が使用され、宮廷では目地に白セメントや石膏〔白灰膏〕が注入されるようになった。

2. 園路計画の基本

(1) 迂回曲折の妙を見せる。

一般に園路の目的は速やかに目的地に到達させることにある。そのため軸線を設定して莊嚴美や一整美を演出する直線路を用いるが、庭園で景観の趣を賞するには、迂回屈折路とすることが大切で、「移歩異景」の手段として重視されている。

明末清初の計成《園冶》には「地形に従

って屈折し、或は麓をうねり、或は水辺で止まり、花の中を通り、谷を渡り、蜿蜒として尽きることがない。」ようにするため、園路は低きから仰ぎ、高きから俯瞰し、方向を転じ、絶えず視線の角度と高さを変化させる必要性を説いている。

更に清代の李漁《閑情偶寄》は「凡そ迂回する路を造るのは、特に趣きがあるからである。それは恰も門に脇門を設けるのと同様で、急用な時にすぐ開き、そうでない時は閉められる。これは俗雅ともに利があり、理にも趣きにもかなっている」と通用門の開閉に例えている。

(2) 自然の趣をもたせる。

園路の計画には自然を貴び、その趣を反映させる。ここでいう自然の尊重とは、地勢に合わせることで、自然環境すべてと融合するよう人工らしきを見せまいとするものである。明代の鄭元《影園自記》には「庭園は広いといっても数畝にすぎないから、計画しきれないという心配はない。山道があっても起伏がないから輿で行ける。それでも自然がひっそりと曲がりくねり、人工のようには見えない」と自然の趣を最大限に利用した庭園であると自讃している。

(3) 路面に装飾効果を与える

前項とは逆である。これは園路自体が目立った装飾効果を持ち、園路全体が一つの景となるよう取り扱われることである。この効果は他の人工物と関連させ、庭園の審美的な要求を満足させるもので、条件に従い様々な材料を用いて各種模様が舗装される。これは「花街舗装地」と称され、中国庭園施設の顕著な特色の一つとなっている。例えば北京の故宮御花園には 700 余种あるといわれ、その題材には様々な吉祥図・歴

史伝説・民間寓話などが用いられている。

(4)庭園景觀を誘導する

園路計画は自然の地勢に順応し、その場所の意趣を採り、庭園景觀に自然美と人工美を密接に関連させることである。これに就いて章采烈は《中国園林芸術通論》に「景によって路を設け、路によって景を得る」と園路計画の原則を述べている。園路は交通路であるばかりでなく庭園景觀の鑑賞を誘導し、絵巻のように景区・景点を来園者の前面に展開させる役目を持つので、計画には変幻自在性を配慮している。例えば回遊路線の大小複数設置により、景觀の隅々まで誘導させ、さらに市街地庭園の限られた空間に多重の変化を与えることができる。

3. 舗装の種類

(1)方磚舗装

磚には城壁用の大きな「城磚」、四角の「大方磚」、「小方磚」、「長方磚」があり、他に南方でよく使われる垂木上の薄い「望板磚」、さねはぎ付きで継ぎ目のある「企口磚」、表面を磨いた「磨磚」などがある。建築内部には正方形の「方磚」が敷かれ、これには「実舗」と「空舗」の二種類あり、実舗の工法は①原地盤を付き固めた後、②砂地業の上に方磚を敷き、③目地を磚粉と桐油を混合した〔油灰〕で固着させ、④傷を補修してから表面を磨き上げる。空舗の工法は湿気を防ぐため地中壁を積んでから敷き詰めるもので、工費が高く、内部に空洞があるので集中加重に注意する。磨磚は室内用で《園冶》には「凡そ建物の床面と路、庭園と住宅内の舗装は違う、思うに庁堂や大きな室内では磨磚で舗装する。」とある。

(2)各種磚舗装〔諸磚地〕

大小様々な磚材を用い、美しい模様を作る舗装をいう。《園冶》には「磚を用いた舗装模様に様々あるが、屋内では磨いた磚を平らに舗装し、屋外の庭では磚を縦に小端立て〔仄砌〕するとよい。これによって作られる様々な模様のうち方勝・疊勝・歩々勝は古代で常用され、現代では人字・蓆紋・間方・紋斗紋がり、磚の長短を適宜按配して用いるべきで、その様式は次のようである。」とあり、園内では地盤の変化に対応しやすい磚の小端立てを使用すべきとしている。続いて「香草辺式：磚で縁を作り瓦で香草、内部に磚や鵞卵石で舗装したもの。毬門式：鵞卵石を縁取り内に嵌めこんだ舗装したもの。波紋式：壊れた瓦の厚薄に従って小端立てした舗装で、波頭には幅の厚いもの、波横には薄いところが用いられる。」とある。【図1】

「方勝」は方形の斜め組み合わせわせ、「疊勝」は方勝を複合したもの、「歩々勝」は方形と斜形を連続した模様で昔から使われていた。「人字」「蓆紋」「間方」「斗紋」は磚を小端立てした模様である。更に小端立てた磚枠に鵞卵石を詰めた「六方式」「儷六方式」「八方間六方式」「套六方式」「長八方式」「八方式」「海棠式」「四方間十字式」が図示されている。この中の「攢」は寄せ集め、「套」は一組をいう。

(3)乱石舗装〔乱石地〕

高低屈折する園路に最適な舗装。石面が小さく塑性が大なので地形の制限を受けにくい。工費が安く施工容易で野趣に富む。計成の《園冶》には「乱石路 庭園舗装に小乱石を用いた石榴状のものは堅固で趣がある。路が屈折上下し山から谷へ行く所にはこの方法がよい。鵞卵石の模様はかえっ

て堅固にならない」と記している。

・(4)鶯卵石舗装〔鶯子地〕

鶯鳥の卵に似た大小楕円形の石を縁取りした枠内に詰めた舗装である。表面に凹凸が多いと歩き難くなる。一般に人通りの多い所には適しないし施工も難しい。計成の《園冶》には「鶯子地 鶯卵石は人が余り歩かぬ所の舗装に用いるべきで、それには大小の石で間をとって舗装するとよい。しかし普通の職人では作れぬ心配がある。また磚や瓦を用いた様々な錦繡模様もよいが、鶴、鹿、獅子と毛鞠をかたどった舗装は「虎を画いて犬に似る」ようで笑止である。」とある。《園冶》の書かれた明末清初の時代を降ると江南の庭園には動植物の意匠が多く見受けられる、中国独自の伝統的な寓意によるものである。

(5)氷裂舗装〔氷裂地〕

青色石板や割れた方磚を組み合わせて作る氷裂模様の舗装である【図2】。廃物の磚などを磨き直したもので趣がある。計成の《園冶》には「青石の板石破片で氷裂模様を舗装する所は、山の斜面、水辺の堤、台の前や亭の近くがよい。この様式は風窓の項でも述べたように任意でよい。舗装は格式に拘らず、壊れた磚を平らに磨いて舗装すればなお好い。」とある。この種の石材は薄く、底の多くは平らでないから凹凸のないよう仕上げに注意する。表面は油灰で艶出し、目地はノロ〔漿〕を詰め、水が浸入らぬよう注意して施工し、春先の凍結溶解による崩壊防止に配慮する。

(6)各種模様舗装〔花街舗地〕

様々な材料で色彩豊かな模様を作る舗装である。清代の姚承祖が《造園法原》にはじめて「花街舗地」という用語を用い、現在

は一般化され、蘇州では「砌街」ともいわれている。

その位置・材料・模様について計成の《園冶》は「想うに庁堂や大きな部屋には磨磚を用い、小路、曲路では多種の長乱石を、中庭では疊勝がよいこともあり、手近な階段には回紋でもよい。八角形の枠に鶯卵石を選んで嵌めこむと蜀錦のようである。層樓の平台に花の梢を彫れば、秦台を想わせることが出来る。その錦の線は瓦片で作し、台面は平板で平らに舗装する。かくて花の中で詩を吟ずる所となり、月下に酒を汲む時には絨毯を敷いたようになる。壊れた瓦片を役立たせるには、太湖石を削って一緒に舗装するがよく、かくて波が揺らめく様相となる。壊れた方磚も使うべきで、磨いて梅花を舗装したり、乱形の氷裂模様を作ることが出来る。」とある。

舗装位置は室内のほか園路、中庭、階段、層樓の平台、一般の台がよく、材料には磨磚・長乱石・鶯卵石・石板・瓦破片・削られた太湖石・方磚片。舗装模様には「疊勝」「回文」「蜀錦」「波紋」「氷裂」が示されている。この中の「回文」は回字を反復した模様。「蜀錦」は四川省錦江産で晒し糸を織った精緻華麗な織物模様をいう。「秦台」は仙女の棲む所または豪華な秦王の台。最後の「梅花」は氷雪の寒気に耐える高潔な君子の寓意をもつ。

この他に(3)鶯卵石舗装の項で述べたような動植物などの模様がある【図3】。これには瓦片のほかに紅・赤の甕片、白磁片、青磚、白・黄・黒・藍の卵石、青弾石、弾石片、藍石など様々な材料を用いた精緻華麗な図案だが手間のかかる高価な舗装である。題材は伝統的な寓意によるもので、動物に

は蝙蝠・鹿・鶴・龍・鳳凰など、植物には松・竹・梅・蓮。万年青（おもと）など、文字には福・寿などがある。「蝙蝠」の蝠は幸福の福と同音、「鹿」は快樂の楽と同音。

「竜と鳳凰」は瑞祥。「松と鶴」は長寿。「竹」は高潔。「蓮花」は汚い泥（世の中）に咲く清い人格に譬えられ、いずれも自然界の生物が使われている。

4. 庭園舗装工法と実例

(1) 園路舗装の構造

車馬人行する園路には衝撃圧と摩損に対する考慮が必要である。その要求にしたがって宋代の技術書《营造法式》では「やや広い園路には、左右両端に2枚乃至4枚の側磚を小端立てし、中央部分を虹の様にやや高く左右に勾配をつけて舗装する」とあり【図4】、前者を平敷き〔平舗砌〕、後者を虹面敷き〔虹面疊砌〕という2種類を図示している。このように宋代に入ると方磚と条磚の組み合わせた堅固な舗装が見られるようになった。

舗装用の磚には素面磚と模様磚〔花磚〕があり、後者は早くも戦国時代の山東省曲阜に蔓草紋舗磚、秦代の咸陽宮殿遺跡などにも模様磚が出土している。

磚舗装の工法は①まず地盤を付き固めした後、②砂を敷き、③その上に磚を敷いて不陸のないよう圧着し、④その目地をパテ〔油灰〕で塞ぎ、⑤孔を補修したら、⑥表面を磨いて仕上げる。凍結防止が必要な北方では、基礎に石灰と黄土を混ぜ合わせた〔灰土〕層、または〔糯米汁白灰〕が使われ、その敷厚さは現地に倣っている。

また磚舗装は初めから水平に敷くと、歩く所が磨耗して低くなるため、排水勾配〔反

水坡度〕をつける必要がある。宋代の《营造法式》によると柱の間を高く、室内中央部をやや低く舗装しており、この方法は明清代にまで継承された。

室内舗装は六朝時代までの座式から唐代の椅子式に変化ても、屋外の土埃が持ち込まれた。その対策に先ず磚自体から土埃が出ない平滑な無地磚が用いられ、また磚には吸水性があり、湿気を呼ぶので油脂類が塗布された。北齊時代には屋根瓦の防水に胡桃油、宋代の《营造法式》には黄腊色と桐油を塗布した油磚瓦、明清代では表面に薄く墨灰を塗り、乾燥したあと胡桃油または生桐油が塗布されている。

(2) 犬走り舗装の構造

「犬走り」とは、軒先の雨水が屋内に侵入しないよう地盤よりやや高く建物沿いに設けた舗装をいう。

商（殷）代の河南省安陽の殷墟や陝西省岐山の西周遺跡には、堅質な大小の卵石舗装を主流としていたが、卵石は稜角が合いにくく、よい接着材がないため、雨水で崩壊し易い欠点があった。そのため周囲に長卵石や磚で小端立て、平磚で横から押さえる工法が工夫された。陝西省鳳翔県の先秦宮殿遺跡、咸陽の宮殿遺跡のほか、山東省曲阜の漢代宮殿遺跡にその例が見られる【図5】。

このように卵石舗装は堅質で形も色も美しいが、軒先の「滴水穿石」に弱く、モルタル〔粗泥灰〕の使用だけでは維持管理が困難になり、次第に磚舗装が用いられるようになり、唐代の長安大明宮重玄門【図6】と西挾城遺跡にその例が見受けられる。

(3) 花街舗装の構造

絨毯模様のように華麗な庭園舗装【図7】。

その巧緻な仕上げに必要な工法はかなり複雑である。劉敦楨の《蘇州古典園林》によると「昔の工法では地盤を固めたのち、細かい土を厚さ 5cm に敷き、その上に各種の磚や石を敷き詰めて図案を作る」と述べている。

その施工は①地盤地業。②細土を厚さ 5cm 敷く。③磚・条石・瓦片などで図案模様の枠を作る。④中に鵝卵石・各種色石・磁片等を敷き詰めて作られる。

(4) 代表的な庭園の園路舗装例

(i) 承徳の避暑山荘：山区にある御道は車馬交通用である。したがって表面には耐磨性の高い花崗岩の長石〔条石〕が用いられ、その施工は①基礎地盤を付き固めてのち。②石灰と黄土を混合した〔灰土〕を 1.5～3.0 m〔1～2 歩〕の基礎地業をし、③その上に 6～8 cm の粗砂で排水勾配をつける。④上部に長さ 1-2m、幅 50 cm、厚さ 20～30cm の長石〔条石〕を敷き詰める。

(ii) 北京の頤和園・御花園：方磚の両側に卵石舗装を敷いた園路で「花路」とも称されている【図 8】。中央の方磚舗装は幅 2～3 m、両側の卵石舗装は幅 50 cm。最初に中央の方磚、後に両側の卵石を敷く。その施工は①石灰と黄土の混合土〔灰土〕を 1.5～4.5m（1～3 歩）に付き固め、②中央部分の方磚敷き下部に石灰と砂〔白灰砂〕を敷き込み、仕上がり高 50～60 cm に舗装する。③同様に両端の卵石敷きを舗装し、上部に石灰に水を加えて攪拌したモルタル〔白灰漿〕を注いでから表面をよく水洗いして仕上げる。

結び

中国庭園の舗装はわが国とそれと比較し

てかなり思い入れが深い。その理由は前述したように「古来、道は“先人の足跡”として尊ばれ美化されてきた」とある。日本人にとって中国庭園の華麗きわまる舗装の驚きも、中国人の永年にわたる「暮らしの文化」の現れであることに気付く。中国庭園を真に理解するには、改めて庭園技法のほかに基本的な生活習慣の研究が必要であろう。なお引用原文は省略した。 以上

主要参考文献

- 1) 東洋文化研究会編《中国の暮らしと文化》(樋田直人「12 中国庭園の美」明石書店 2005。
- 2) 李魚《閑情偶寄》卷 4 居室部・贅地 1671
- 3) 中国科学院編《中国建築技術史》科学出版社 1990
- 4) 劉敦楨《蘇州古典園林》中国建築工業出版社 1979
- 5) 計成《園冶》広文書局有限公司 中華民国 72 年
- 6) 童寯《江南園林志》中国建築工業出版社 1984
- 7) 楊鴻勳《江南園林論》中国建築工業出版社 2003
- 8) 羅哲文《蘇州古典園林營造錄》上海人民出版社 1994
- 9) 章采列《中国園林芸術通論》上海科学技术出版社 2004
- 10) 馮鐘平《中国園林建築》精華大学出版社 1988
- 11) 阮榮春《舗地の文様》(舗地・中国庭園のデザイン I N A X 出版 1995
- 12) 余志超《細説中国園林》光明日報出版社 2005

【図1】計成《園冶》（廣文書局版）に見る磚舗装

【図7】蘇州の模様舗装例〔花街舗地〕（劉敦楨《蘇州古典園林》から作成）

盤長紋鋪地（仏室の一つ・幸福崩）

【図3】寓意による模様舗装（羅哲文《蘇州古典園林造宮録》から作成）

【図2】氷裂舗装の例——江南に多い「碎石氷梅路」
《中国古代建築技術史》

【図4】宋代《營造方式》の磚舗装

【図5】卵石製犬走りの遺跡例
《中国古代建築技術史》

【図6】方磚製犬走りの遺跡例
《中国古代建築技術史》

【図8】方磚・卵石舗装の例
——北方の宮苑に多い「方磚卵石嵌花路」
《中国古代建築技術史》